
紅い天使

朱夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅い天使

【Nコード】

N2766BA

【作者名】

朱夜

【あらすじ】

ファールレン王国の第一騎士団に所属する「ラミア・ホルム・レーミア」は戦争最中、ファールレン王国の国王陛下より下された命により、団長の「ロレン・バーミア」とその他二人の騎士と共に古代兵器の眠るダンジョンへとやってきていた。藁にもすがる思いでやってきたダンジョンの最下層には、青年の石造が一つだけだった。八つ当たりにも似た暴言を吐き終え、団長のロレンが「帰るぞ」と言った時だった。いまだ戦争中だった敵国のライカール王国の騎士が、ダンジョンの最下層へと踏み込んできたのだった。

残された二人の騎士とラミア、二人の騎士は惨めにも命乞いをし、その命を終え、最後に残されたラミアは、まだ見ぬ世界への未練を抱きながら、戦いを挑んだ。

しかし、戦いに敗れ、死が訪れようとしたときだった。

彼女は、紅い天使を見たのだった。

序章・プロローグ

魔物の巣窟と知られるダンジョン。

最下層には、古代兵器が眠っているとされている。

ファーレン王国第一騎士団団長「ロレン・バーミア」は、幾人かの部下を連れてそこへやってきていた。

最近になって激化した隣国との戦争との状況は一刻を争う程となり、急遽、国王陛下自らこのダンジョンに眠る古代兵器を持ち出せとの命令を受けたのは、三日前だった。

「団長、本当に、ここに古代兵器があるのでしょうか？」

そう言ったのは、第一騎士団の中でも剣術ならロレンよりも上の女性「ラミア・ホルム・レーミア」だった。

そして、その疑問は今ここにいる誰もが持っているものだった。

事実、ロレン自身そう思っているのだから。

「分からない、しかし、陛下が命令を出した以上、我々はその古代兵器を手に入れなければならん」

国王陛下に絶対の忠誠を誓っているロレンの言葉に、ラミアは内心あきれていた。

ラミアの家はファーレン王国でも上位貴族に位置する公爵の名を持つ家だ。

公爵であるなら、それなりに国に忠誠を持っているはず。

しかし、ラミアは違った。

女性だが、幼い頃より男との気が合うほうで、ままごとをするより

も鬼ごっこをするほうが好きだったからだ。

もちろん、家柄もあり、ラミアの性格は多少は女性っぽくはなっている。

しかし、根っこの部分は冒険好きでこの世界を見て回りたい少年のような心を持っているのである。

それがどうしてか、騎士学校に行かされ、騎士にされてしまった。

親を見返すためと打ち込んだ剣術を見込まれ、ファーレン王国最強の騎士団に配属され、副団長の座におらずとも団内での人気もあり、剣術も誰よりも強いのだ。

しかし、親を見返すどころかそれを先手に取られ、婚約の話まで出てきたのだ。

ラミアからしたら冗談では済まされない話しだ。

縁談はラミア自身がぶち壊したが、そのせいで数日の軟禁生活を送ったこともある。

自由の無い日々嫌気がさし、それはやがて王国への忠誠心を無くさせる程へと至ったのだった。

何が原因かと言われれば、やはりファーレン王国やラミアの家族だろう。

そして、第一騎士団の団長を務めているロレンと言う男の元にいるからこそ、その忠誠心は遠くなる一方だった。

（一に王様二に王様、本当に王様王様って……馬鹿じゃないのかしら）

心の中で毒を吐きながらも、最下層への入口を見つけたロレンの後を追う。

「この先に何があるのかは王国の調査隊でもわかっていない、皆、

十分気を付けるように」

「……はっ!」「」

ロレンの言葉に、ラミアと、その他二人の騎士が騎士の礼を取って答える。

最下層と言われるそこは、長い階段を下りてすぐだった。

ただっ広い空間の億には、祭壇があり、そこに一つの石造があつた。

「これが、古代兵器?」

ロレンの疑問の声に、一人の騎士が声を上げた。

「この石造が……?」

ラミアを除く、団長のロレンと二人の騎士はここまでの道のりを何なんだと嘆いた。

しかし、ラミアは違った。

目の前に佇む青年の石造に、目が離せなくなっていた。

(この石造、どうみても不自然……彫った跡が全然ない……それに、とてもじゃないけど兵器に見えない……憎しみと、悲しみにくれた顔をしている……)

ただの石造とは思えないラミアだからこそその感想だった。

他の三人は気が晴れたのか、八つ当たりのような暴言を吐き終える。

「帰るぞ」

ロレンの冷たい声に、ラミアは生返事を返して石造から離れた。トツ、と言う音と共に、ロレンが倒れた。その胸には、鉄の矢が刺さっている。

「団長！」

「だ、誰だ！ 一体どこから！」

二人の騎士が騒ぐのを余所に、ラミアは腰の剣を抜いて構えた。次はどこから来る……？

しかし、矢は飛んでこず、代わりに赤い鎧に身を包んだ騎士たちが最下層の部屋へとなだれ込んできた。

「なっ！ なんでここにライカール王国の兵士が！」

「せ、戦争はまだ終わっていないはずだ！」

なだれ込んでいた騎士たちは、陣形を組んで動きを止める。その中から、一人の男が出てきた。

「戦争は俺達の勝ちだ、今は残存兵力をかたっぱしからぶっ殺してるところだよ、丁度、お前らで最後だ、はっ！ 聞かせてやりたかったぜえ？ お前等の腑抜けた王の言葉をよお……」

そう言つて、男は一度この部屋を見渡す。

「見たところ、あの王の言っていた古代兵器つてのは無さそうだな、命乞いしながら貴様等の事を吐くあいつは見ものだったぜえ？」

男は、凶悪な笑顔を浮かべて幅広の剣、バスターソードを構えた。

「あん？ お前は第一騎士団の「鮮血姫」せんけつきじゃねえか、お前も古代兵器を頼ってたのか？」

「た！ 頼む！ 俺達は降参する！ だから命だけは助けてくれ！」

「俺もだ！ 頼む！ この通りだ！」

二人の騎士が、剣を捨て、よたよたとライカール王国の騎士へと近づいていく。

しかし、先頭に出ていた指揮官らしき男は、近づいてきた騎士を見て舌打ちをした。

「戦わずして負けを認めるなんざ、騎士としちゃ失格だな……お前等は一生奴隷で構わねえな」

「なる！ 奴隷にでもなんでもなる！ だから殺さないでくれ！」

「あ、ああ！ 家畜にでもなんでもなるから！」

そう言った二人の騎士に、男は笑った。

「ハッハハハハハハ！ おいお前等！ 聞いたか？ 家畜だつてよ家畜！ これがファールン最強の騎士団の騎士の言葉かよ！ ……お前等、生きる価値ねえよ」

言葉を出す暇もなく、二人の騎士は首を刎ねられた。鮮血が舞、部屋の地面に赤い血をぶちまけた。

「さあ、後はお前だけだぜ？ 鮮血姫、降参するか？ それとも戦うか？」

事の成り行きを黙ってみていたラミアは、剣を強く握って祈った。

（こいつらに殺されるにせよ、捕まるにせよ、行きつく場所は同じ、だけど、私はまだ死にたくない！ もっと世界を見たい！ 冒険したい！ まだ、まだ……恋だっと思ってないのに！）

青春期の後半を迎え始めているラミアだが、それでも死は怖かった。いや、死を恐れない者などいないだろう。しかし、それが現実となつて襲いかかると、その恐怖は一層を増し、助けを求める声となる。

そして、ラミアの本能は、降参することを拒否した。

剣を構え、敵を睨み、威圧する。

「私はファールン王国……私は！ ラミア・ホルム・レーミア！ 私は負けない！ 私は屈しない！ 私は！ 私は死なない！」

それは、明らかな宣戦布告、この場にいるライカールの騎士総勢50人に向けての……。

「それでこそ騎士だ！ いいかてめえら！ 騎士なら騎士らしく戦つて死ね！ 行くぞ！」

おお！ と力強い声が男の背後から帰ってくる。
男はバスターソードを構え、言った。

「ライカール王国赤炎騎士団団長！ ボルツ・ゲツタオ！」

ボルツを追い越し、ライカールの騎士が三人、ラミアに斬りかかる。ラミアは三人を視野に入れ、呼吸を合わせる。

間合いギリギリまで引き寄せ、ラミアは動いた。

向かって左の騎士の突きを剣で流し、力を込めて味方の前へ放り出す。

慌てた二人の騎士の首を、ラミアは素早く刎ねた。

残る一人、突きを出した騎士はラミアへと振り向く前にその両足を失っていた。

ボルツ視点

（流石はファールン最強の騎士と言われる程の女、国内でどう言われていようが他国の俺達の評価は間違いなくあの女が最強だ……）

ボルツは、目の前で闘うラミアを認め、尊敬していた。

女にして最強の名を欲しいがままにするラミアを、ボルツはいつか超えたいと思っていた。

しかし、理解する。

目の前で既に10を超える味方の騎士を殺しているラミアに、勝つのは難しいと。

しかし、数で押せば話しは別だ。

数の暴力でラミアを殺せずとも、疲労させることはできる、そこを

打ち取ればラミアにはいとも簡単に勝てるだろう。
しかし、それではボルツの矜持きようじが許さなかった。
どちらともが万全の状態で戦い、それに勝利する。
それができなければボルツの願いは達成されない。

最強に手は届かない。

ただ、最強の隙について殺した卑怯者にしかない。
それでもボルツは、自国のため、そして、幼いころより身寄りのない自分を友と慕ってくれた若き王のために、最強を殺さないわけにはいかないのだった。

ラミア視点

既に殺した騎士の数は20を超え、剣の血糊が取れなくなった頃、ラミアの疲労は極限に達していた。
常人であればライカールの精鋭とも言われる赤炎の騎士を相手に3人相手にできれば上出来の所を、ラミアは今のところで25を斬っていた。

もはや意識はもうろうとし、目の前すら見えなくなりそうだった。
しかし、それでも生へと縋り付くその姿こそ、強者である証拠であった。

強者とは同時に臆病でもある。

強くなればなるほど、色々な物を背負う。

それを守るためには、臆病にならなければならない。

臆病になり、死にたくないから、守りたいから、剣を振り、訓練を

つみ、自分を極限にまで追い込む。

それが結果として出ただけのことであり、強者でありながらもラムミアは臆病の一人であった。

隙を見せた訳でもない、油断をしていたわけでもない。

しかし、弾き飛ばされた剣はこの手には戻ってこない。

ライカールの騎士の剣が左肩を撫でるように滑り、ラムミアの防具を斬り裂いた。

「あぐっ！」

衝撃と共に飛ばされ、ラムミアは祭壇に祭られている石造の前へと倒れ掛かった。

「団長、最後は、団長の手で……」

「そうです！ ファーレン最強の騎士をその手で！」

周囲がボルツを注目する中、ラムミアは体を起こし、石造に背中からもたれかかった。

剣で斬られたと同時に、その衝撃で骨まで折れたようだ。

口の中が血であふれかえっている。

ごふっ、と吐き出せばそれはボタバタとラムミアの美しい顔を汚した。

近づいてくる足音に、ラムミアは悟った。

死ぬのだと、ここで終わりなのだ。

「最後に言い残すことはあるか？」

ボルツの言葉に、ラミアはゆるゆると首を横に振った。
ボルツは目をつぶり、「そうか」と言った。

ボルツの振り上げた剣を、ラミアは濁った眼で見ている。
それが振り下ろされれば、自分の命は終わるのだと……。
まだ見ていない世界に未練を残しながら、自分は逝くのだと……。

「死ね！ ラミア・ホルム・レーミア！！」

最後に見たのは、宙に踊る赤い髪と、力強い何かだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2766ba/>

紅い天使

2012年1月7日01時55分発行